第２節　小型海獣葡萄鏡および柴垣柳樹双鳥鏡について

１．はじめに

讃良郡条里遺跡の今回の調査で出土した特異な遺物の一つとして、２点の銅鏡があげられる。そのうち１点は小型海獣葡萄鏡で、通常の海獣葡萄鏡にある外区部分を欠いており、特徴的な製作方法が想定される鏡である。しかし、今回の讃良郡条里遺跡での出土は中世包含層からの出土であり、出土地点では下層に製作・使用時期の遺構面も存在せず、この鏡の出土意義を考える要素に乏しい。また、もう１点は柴垣柳樹双鳥鏡で、出土地点から大将軍社との関連で評価することが出来るが、類例に乏しい鏡である。そこで、ここではこれらの鏡について他の出土例等を概観しながら検討し、今回出土した意義について考えることとしたい。

２．既往研究概要

海獣葡萄鏡自体の研究史は古く、中国大陸では宋代から研究されていた。日本では明治時代に八木奘三郎が「海獣葡萄鏡」の名を用い、漢式の鏡とした（八木 1902）。高橋健自はこれを出土例等から改め、唐式鏡として分類した（高橋 1911）。それ以来数多の研究が取り組まれてきたが、讃良郡条里遺跡出土のものと同様の外区を欠く小型海獣葡萄鏡については、それほど取り上げられた回数は多くない。これらの鏡はその報告があらわれる最初期から既に海獣葡萄鏡の内区のみを一つの鏡として鋳造したものであろうことが指摘されていて（横山 1988）、片山昭悟によって研究対象として取り上げられている（片山 1994）。そして、2001 年には杉山洋と大谷徹がそれぞれこの外区を欠く小型海獣葡萄鏡を主体的に取り上げて研究を行った（杉山 2001、大谷 2001）。杉山は後にこれを改稿したものを公表している（杉山 2003）。これらの研究によりこの種の鏡の基本的な点が明らかとなってきている。

柴垣柳樹双鳥鏡は、和鏡の中でも室町期に盛行した「擬漢式鏡」の一種として分類される鏡で、類例の少ない鏡である。類例のうち長野県霊泉寺経塚出土鏡は出土が古く、同時に出土した経筒に紀年銘があったため広瀬都巽等に早くから取り上げられた（広瀬編 1938 等）。広瀬は戦前の和鏡研究の中心人物であり、その論考は現在でも基本文献となっている（広瀬 1974 等）。その後この鏡は中野政樹により擬漢式鏡の例として概説に取り上げられた（中野 1969）。擬漢式鏡についてはその後久保智康が分類と年代観を述べ（久保 1997、1999）、青木豊はその分類と変遷を詳細に考察している（青木 1997）。近年では青木を中心にして全国の出土和鏡が集成されている（青木ほか編 2007）。

図 679　讃良郡条里遺跡出土小型海獣葡萄鏡実測図とその原鏡模式図

図 680　讃良郡条里遺跡出土
柴垣柳樹双鳥鏡実測図

3．讃良郡条里遺跡出土の鏡

小型海獣葡萄鏡（図 679 － 1）　讃良郡条里遺跡で出土した小型海獣葡萄鏡は、直径 3.9cm、鈕高 0.5cm、縁厚 0.4cm、鏡体の厚さ 0.1cm、反り 0.1cm である。鏡背面中央に伏獣形の鈕があり、そこに鈕孔が設けられている。鈕の周囲には四つの獣像があり、それぞれ像姿は異なっている。その外側には小さな珠点が七つあり、葡萄紋と考えられる。葡萄紋は鏡縁部に取りつく形になっている。獣像・葡萄紋ともにかなり不鮮明である。原鏡となった鏡（図 679 － 2）の外区部分がない内区部分のみの鏡であり、通常の海獣葡萄鏡の内区と外区の界圏部が鏡縁部となっている。鏡縁部に鋳造時の湯道の切断痕跡が残っており、鏡縁部・鏡面ともに未研磨である。類例の出土から、7 世紀後半から 8 世紀前半頃の製作と考えられる。

柴垣柳樹双鳥鏡（図 680）　讃良郡条里遺跡で出土した柴垣柳樹双鳥鏡は、直径 9.3cm、鈕高 0.55cm、縁高 0.95cm、鏡体の厚さ 0.1cm である。鏡背面中央に亀形鈕が頭を向かって左に向けて配される。亀形鈕の甲羅中央には菊花菱紋を充填する。内区は向かって上部に柳の枝が垂れている様子を表し、右部に柴垣紋様を配する。左部に双鳥紋を充填し、その表現や類例から双鳥は雀である可能性が高い。下部には直線的な土坡が表現される。土坡の下には類例では流水が表現されるが、本鏡では 2 列の珠点状の表現に簡略化されている。内外区の境には 5 窠の窠紋形界圏を有するが、その表現は入り組みがなく外周円形である。また界圏に沿った内側には圏線とそれに重なる小形珠紋帯を有する。外区は内側から櫛歯紋帯、隆帯上の断続連珠紋帯、櫛歯紋帯の順で、最外周には突線がめぐっている。縁は直角中縁である。

青木豊の「擬漢式鏡」分類（青木 1997）のⅡ類に[1)]、久保智康分類（久保 1997）のⅡ類に分類される。後述する類例と比べ流水の表現が簡略化されており、14 世紀後半の製作が考えられる。

4．それぞれの類例

小型海獣葡萄鏡　外区を欠く小型海獣葡萄鏡の類例は、これまでに幾度か集成が行われている（横山 1988、大谷 2001、杉山 2001、2003 等）。その研究に導かれながら探索すると、12 点の類例が管見に及んだ（表）。個々の類例の詳細を述べることは紙幅の関係もあり省略するが、表をもとにその傾向をみると、12 点のうち 8 点が奈良県内での出土で突出している。その内容も、7 世紀から 8 世紀にかけて都が置かれていた藤原京域・平城京域での出土が多い。それ以外では埼玉県、石川県、愛知県、兵庫県で 1 点ずつ出土していて、大阪府下では初の出土である。

表 6　外区を欠く小型海獣葡萄鏡集成表

番号	地域	所在地	出土遺跡	面径(cm)	出土遺構	遺構時期	文献
1	埼玉県	さいたま市大谷口	明花向遺跡	3.68	包含層	縄文～弥生を主とした包含層	①
2	石川県	羽咋市寺家	寺家遺跡	3.94	祭祀地区SX02	寺家Ⅴ期(10世紀初頭)	②
3	愛知県	西尾市西幡豆町後田	後田遺跡	3.50	不明	不明	③
4	奈良県	奈良市三条栄町	平城京(第314次)左京四条三坊十坪	3.91	SD26(東堀河)	奈良時代(8世紀)	④
5	奈良県	奈良市三条本町	平城京(第208次)左京四条四坊十三坪	3.98	包含層	奈良時代(8世紀)	⑤
6	奈良県	奈良市菅原町	平城京(第273-2次)右京二条三坊三坪	3.76	包含層	奈良時代(8世紀)	⑥
7	奈良県	奈良市西大寺北町	西隆寺跡	3.80	SE740井戸最上層	西隆寺建立前(8世紀前半～中頃)	⑦
8	奈良県	橿原市四条町	四条大田中遺跡	3.80	焼土土坑	7世紀末～8世紀初頭	⑧
9	奈良県	橿原市四条町	四条大田中遺跡	4.00	焼土土坑	7世紀末～8世紀初頭	⑧
10	奈良県	橿原市四分町	藤原宮(第80次)西方官衙南地区	3.79	先行条坊五条大路SF6360路面上	飛鳥Ⅳ期(7世紀後半)	⑨
11	奈良県	明日香村阪田	坂田寺跡	3.90	SD171(東面南北回廊東側雨落溝)	平城Ⅲ期(8世紀後半)	⑩
12	兵庫県	神戸市東灘区深江北町	深江北町遺跡	3.90	掘立柱建物2北西外部(包含層)	7世紀末～9世紀初頭	⑪
13	大阪府	四條畷市砂	讃良郡条里遺跡	3.90	包含層	中世	本書

柴垣柳樹双鳥鏡　この鏡は、各種の和鏡図録等を縦覧しても掲載の極めて少ない鏡である。筆者の管見に及んだ類例は、同種鏡としては２点あった。１点は東京国立博物館所蔵の長野県上田市平井字唐沢口（旧西内村域）の霊泉寺経塚出土鏡である（小山編 1923、広瀬編 1938、蔵田 1964）。明治 30 年頃に同地の白山社境内地より出土したものという。この鏡は、直径 8.8cm、縁高 0.7cm である。讃良郡条里遺跡出土鏡と紋様構成はほぼ同様であるが、鈕が花蕊座鈕である点が異なる。石組みの石室内から小刀、笄（こうがい）、小柄（こづか）等とともに経甕に入れられた金属製経筒２、和鏡５、銅銭 13 が出土したうちの１点で、同時に出土した経筒には「天文五年」（1536 年）銘がある。経筒銘より古い 14 世紀前半から中頃の製作と見られている（青木ほか編 2007）。

２点目は島根県松江市の下黒田遺跡出土鏡である（昌子編 1988）。この鏡は、直径 9.8cm、縁高 0.9cm である。こちらも讃良郡条里遺跡出土鏡と紋様構成はほぼ同様であるが、亀形鈕の向きは反対で頭を右に向けている。また双鳥紋の充填部はやや上の位置である。土坑から横位での上半分を欠いた備前焼壺に入れられた状態で、土師器皿 16 以上、北宋銭・明銭計 29 枚、籾殻、人毛とともに出土した。この土坑は出土遺物から遺跡の東側に広がる黒田館跡に関連する 15 世紀後半の地鎮等に伴う遺構と報告されている（昌子編 1988）。鏡の製作年代は 14 世紀前半とみられている（青木ほか編 2007）。

このほか、紋様構成のよく似た鏡として静岡県下田市の白濱神社境内遺跡古宮山地区出土鏡があげられる（大場 1943、長野・日野 1962、深澤ほか編 2011）。この鏡は柳樹双雀鏡で、鈕は捩菊座鈕とされ、内区には讃良郡条里遺跡出土鏡とは異なり柴垣の表現がない。ただし外区紋様には柴垣様のものを用いている。面径約 6.8cm、縁高約 0.5cm とやや小さい。江戸時代の文化九（1812）年に神社の現本殿地奥付近から発掘された記録が残る鏡である[2)]。同時に出土したとされている和鏡３面と「嘉禄元年」（1225 年）銘の御正躰が神社に所蔵されているが、柳樹双雀鏡のみ失われ現存しない。同時に出土した鏡はいずれも 13 世紀のものとされ、本鏡も同時期のものとされている（深澤ほか編 2011）。

５．讃良郡条里遺跡出土鏡の位置付け

外区を欠く小型海獣葡萄鏡の類例を概観すると、奈良県内、それも藤原京・平城京域での出土が多いことが注目される。この点からは、これまでに指摘されるように畿内中央での製作によるものとみてよいだろう（大谷 2001、杉山 2001、2003）。寺家遺跡等の海上交通の要衝での国家的祭祀遺跡から出土している点も、中央からの流通であることを裏付けると言える。

讃良郡条里遺跡出土鏡は湯道の切断痕跡があり、初めからこの面径の鏡として製作されたことが明らかである。杉山洋が想定するような枝構造の連鋳式鋳型による鋳造かどうかは判断できないが（杉山 2001）、大谷徹が想定するように「祭祀に用いるための儀鏡」として（大谷 2001）、原鏡となる外区の存在した海獣葡萄鏡（図 679 －２）から意図的に外区を省き面径を縮小した鏡が製作されたものと考えられる。鏡面等が研磨されず、鋳放しの状態で出土するものが多いこともこの点を裏付ける。

今回の讃良郡条里遺跡では中世包含層からの出土であったが、微高地上であり中世の削平も考えられる位置であった。今回の調査地の北側で行われた発掘調査では奈良時代にこの地域で早くから条里制が施行されていたことがわかっている（中尾ほか編 2009）。この鏡が中央からの流通と考えられることを考慮すれば、この条里制施行に関係する有力者が、この地域に持ち込み祭祀に使用した鏡である可能性も考えてよいだろう。また、この種の鏡は都城内で溝から出土し、沿岸の祭祀遺跡で用いられるなど水との関連が注意され（片山 1994、大谷 2001、杉山 2003）、鏡と水は従来からその関連が深いこと

が指摘されている（中野 1969 等）。讃良郡条里遺跡も古代河内湖の沿岸付近にあたる遺跡であり、今回出土した鏡は藤原・平城京期の祭祀のあり方と広がりを考える上で重要な資料といえるだろう。

柴垣柳樹双鳥鏡については、これまで２点の類例が出土している事がわかった。その紋様表現を比較すると、讃良郡条里遺跡鏡は紋様の一部に簡略化が見られ、14 世紀後半の製作と見られる。青木豊は窠紋形界圏の入り組みがなくなり外周円形となるのは 14 世紀中頃としており（青木 1997）、久保智康は「花形の界圏」すなわち青木が「窠文形」とする界圏の出現自体を 14 世紀後半まで降らせている（久保 1997、1999）。『全国出土和鏡集成』では本鏡式は 14 世紀前半からの製作が考えられているが、青木や久保の指摘を考慮すれば、あるいは本鏡式の製作時期自体が若干降る可能性も考慮に入れるべきであろう。出土例は全て「製作時期」から一世紀以上経過しているとみられる点も注意すべきである。

室町期の擬漢式鏡については、これまでに京都市内の八条院町付近で製作が行われていたことが一連の発掘調査により明らかになっている[3)]（網 1996）。擬漢式鏡の製作については一稿を草したことがあるが（實盛 2011）、讃良郡条里遺跡出土鏡が八条院町付近での製作かどうかは現時点では不明である。しかし、八条院町出土の鋳型には柳葉状の紋様があるものも含まれているようであり、仮に八条院町付近での製作であるとすれば、京の製品の流通を考える上で本鏡は重要な資料となると言えるだろう。

柴垣柳樹双鳥鏡が出土したのは、明治 44 年に忍陵神社に合祀された砂村鎮座の大将軍社（山口編 1972、山口 1990）の境内地である。この大将軍社は、方位の吉凶を司る八将神の一神である大将軍神を祀る神社で、これまで創建年代が不明であった。今回の調査で、室町後期（16 世紀中頃～後半）まで遡ることが明らかとなったが、本鏡もそれを裏付ける遺物の一つと言える。出土位置は神社敷地中心の社殿跡付近であり、御正躰等として用いられたものか神社への奉納鏡の可能性が考えられるだろう。

本節の作成に当たっては、下記の諸氏・諸機関にお世話になった。記して謝意を表したい。

鐘方正樹、楠惠美子、杉山　洋、深澤芳樹、降幡順子、国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良市教育委員会。

（實盛良彦）

註

1）ただし、青木はこのⅡ類について、その紋様が櫛歯紋帯以外は漢鏡との関連が希薄であることから「本来擬漢式鏡と呼称すべき鏡ではないものと考えられる」としている（青木 1997）。

2）国学者で著名な平田篤胤が文化九（1812）年に著した『白濱神社略縁起』に記録されている。

3）八条院町付近での既往の調査およびその報告については、上村 2002 や山本 2010 に一覧表が掲載されている。

参考文献

青木　豊 1997「所謂擬漢式鏡に関する考察」『國學院大學考古学資料館紀要』第 13 輯、國學院大學考古学資料館。

青木　豊ほか編 2007『全国出土和鏡集成』平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書。

網　伸也 1996「和鏡鋳型の復元的考察」『研究紀要』第３号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所。

上村和直 2002「京都八条院町をめぐる諸問題」『研究紀要』第８号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所。

大谷　徹 2001「浦和市明花向遺跡出土の小型海獣葡萄鏡」『埼玉考古』第 36 号、埼玉考古学会。

大場磐雄 1943『伊古奈比咩命神社』伊古奈比咩命神社社務所。

片山昭悟 1994『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様』。

久保智康 1997『京都国立博物館蔵和鏡』京都国立博物館。

久保智康編 1999『中世・近世の鏡』日本の美術第 394 号、至文堂。

蔵田　蔵 1964「経塚論　六、東京国立博物館保管、中部地方出土の経塚遺物（下）」『MUSEUM』第 159 号、美術出版社。

小山眞夫編 1923『小縣郡史』余編、小縣時報局。

實盛良彦 2011「三重県神島八代神社所蔵二神二獣鏡について－室町期銅鏡製作の可能性を探る－」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』

ＸＸＶ、考古学研究室紀要第３号、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室。
昌子寛光編 1988『下黒田遺跡発掘調査報告書』松江市建設部建設課・松江市教育委員会。
杉山　洋 2001「小型海獣葡萄鏡について」『日本文化史研究』第 33 号、日本文化史学会。
杉山　洋 2003『唐式鏡の研究』鶴山堂出版部。
高橋健自 1911『鏡と剣と玉』冨山房。
長島健・日野一郎 1962「金工と石造品」『伊豆下田』地方史研究所。
中尾智行ほか編 2009『讃良郡条里遺跡』Ⅷ、財団法人大阪府文化財センター。
中野政樹 1969『和鏡』日本の美術第 42 号、至文堂。
広瀬都巽編 1938『扶桑紀年銘鏡図説』大阪市立美術館学報第一、大阪市役所。
広瀬都巽 1974『和鏡の研究』角川書店。
深澤太郎ほか編 2011「静岡県下田市白濱神社所蔵考古資料調査報告」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第３号第１分冊、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター。
八木奘三郎 1902「鏡鑑説」『考古便覧』嵩山房。
山口　博編 1972『四條畷市史』第一巻、四條畷市役所。
山口　博 1990『四條畷市史』第４巻、四條畷市役所。
山本雅和 2010『平安京左京八条三坊九町跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所。
横山貴広 1988「海獣葡萄鏡小論」『寺家遺跡発掘調査報告』Ⅱ、石川県立埋蔵文化財センター。

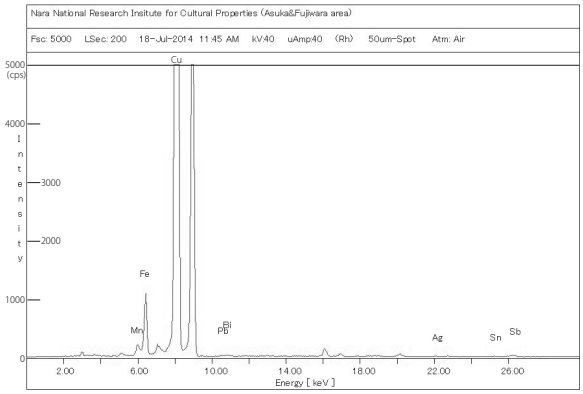
表文献

①大谷徹 2001「浦和市明花向遺跡出土の小型海獣葡萄鏡」『埼玉考古』第 36 号、埼玉考古学会。
②小嶋芳孝編 1988『寺家遺跡発掘調査報告』Ⅱ、石川県埋蔵文化財センター。
③宮内庁書陵部 1992『出土品展示目録　古鏡』学生社。
宮内庁書陵部陵墓課 2005『宮内庁書陵部所蔵　古鏡集成』学生社。
④三好美穂ほか 1995「平城京左京四条三坊十坪の調査　第 314 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成６年度、奈良市教育委員会。
⑤立石堅志ほか 1991「平城京左京四条四坊十三坪の調査　第 208 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成２年度、奈良市教育委員会。
⑥鐘方正樹ほか 1994「平城京右京二条三坊三坪の調査　第 273-2・283 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成５年度、奈良市教育委員会。
⑦蓮沼麻衣子ほか 2000「西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査　第 306 次・第 309 次」『奈良国立文化財研究所年報』2000-Ⅲ、奈良国立文化財研究所。
⑧齊藤明彦・今尾文昭 1989「四条大田中」『大和を掘る　1988 年度発掘調査速報展』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
片山昭悟 1994『奈良時代の鏡　千二百年前にあこがれた紋様』。
⑨花谷浩編 1996『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』26、奈良国立文化財研究所。
⑩奈良国立文化財研究所編 1991『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』21、奈良国立文化財研究所。
⑪山下史朗編 1988『深江北町遺跡』兵庫県教育委員会。

付編　讃良郡条里遺跡出土鏡の分析

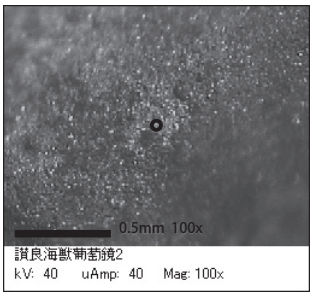
讃良郡条里遺跡で出土した銅鏡２点については、国立文化財機構奈良文化財研究所の降幡順子氏に依頼し、蛍光Ｘ線分析装置（EDAX 製 EAGLE Ⅲ）を用いた非破壊での成分分析を行った（図 681）。分析にあたっては発掘調査時のいわゆるガジリ部や、錆が剥がれた部分等比較的腐食の程度が少ない箇所を顕微鏡観察により分析位置として選択した。ただ、あくまでも非破壊での分析であり、表面腐食層の影響は排除できないため、分析した値は測定位置表面での値を示すにとどまることを記しておく。

また、この分析時に撮影した透過Ｘ線写真の分析の結果、降幡氏により柴垣柳樹双鳥鏡の外区部分にタタキ仕上げとみられる補修痕が見つかった（図 682）。



蛍光Ｘ線スペクトル

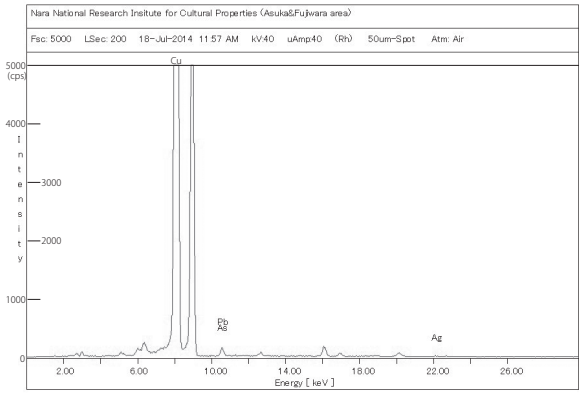
測定箇所（鏡背）



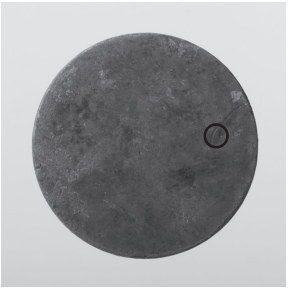
分析結果（wt%）

鉄（Fe）	銅（Cu）	鉛（Pb）	ビスマス（Bi）	銀（Ag）	錫（Sn）	アンチモン（Sb）
1.1	96.4	0.27	0.36	0.24	0.28	1.3

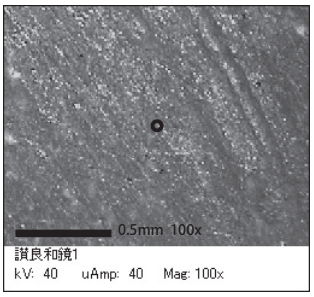
小型海獣葡萄鏡



蛍光Ｘ線スペクトル



測定箇所（鏡面）

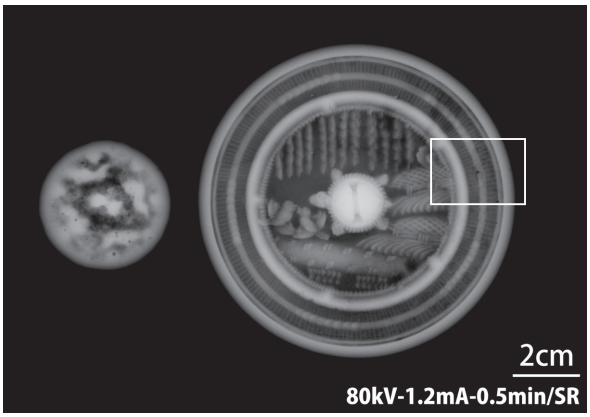


分析結果（wt%）

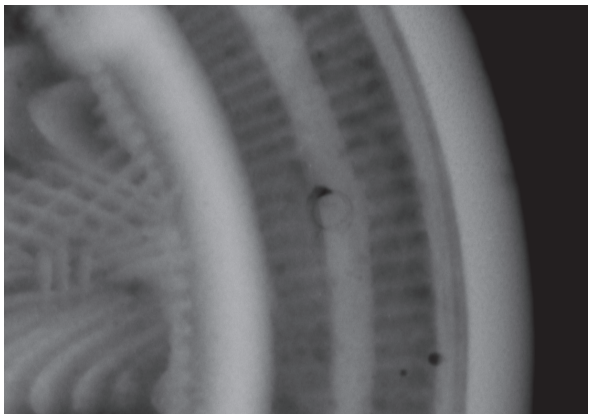
銅（Cu）	ヒ素（As）	鉛（Pb）	銀（Ag）
98.2	0.22	1.3	0.28

柴垣柳樹双鳥鏡

図 681　小型海獣葡萄鏡・柴垣柳樹双鳥鏡成分分析結果



透過Ｘ線写真



透過Ｘ線写真（左写真□で囲んだ部分）

図 682　小型海獣葡萄鏡・柴垣柳樹双鳥鏡透過Ｘ線写真